

2010.4.5 「新党問題と道義の回復」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。

先週末から今週にかけて、平沼・与謝野新党の話題で持ちきりになっているようです。新党を作られることは、それぞれの政治家の方の信念ですから仕方のないことだと思います。しかし、ひとつ確認して頂きたいのは、とにかく今、政治の最大の課題は、鳩山民主党、もっといえば小沢氏が牛耳る民主党のともない暴走を止めるために、来るべき参議院選挙で民主党を参議院において過半数割れに追い込まなければならないということです。そして、彼らが過半数割れになった途端、間違いなく民主党は分裂してしまうでしょう。その時にこそ政界再編が始まるわけであって、新党はその時でもよかったのではないかと、というのが私の正直な感想であります。しかし、いずれに致しましても、我々はこの次の選挙で民主党を過半数割れに追い込むために、ありとあらゆることをしていかなければなりません。それは今の民主党政権の問題点を、国民に正確に伝えることだと思うのです。その一つは、政治にモラル、道義というものが無くなってしまっているということです。これは政治と金の問題についても然りであります。

それから、財源がなく実行できないマニフェストを選挙戦で平気で有権者に訴えてきた。そのこともそうでありまして、実際に彼らがしようとしている政策自体が、例えば子ども手当に代表されますように社会で子どもを育てると言いながら、そのお金はどうするのかといえば、結局はその子ども達が返していく借金で賄うという究極の借金付けまわしであり、親の責任放棄でもあるわけです。このような不道德なことがまかり通るようであれば、日本の国は間違いなく崩壊してしまいます。

そんな中、我々自民党の訴えるべきは、政治に道義を取り戻すことだと思います。その中でも一番大きな取り戻さなければならない道義は、自分で自分の国を守る、自分達の家族は自分達が命に代えても守っていくということです。この人間としての当たり前のことを政治家が言わなければならないと思うのです。そして、これこそが戦後政治の中で実はタブーになり、失われてしまった一番大切な道義ではないかと思うのです。

戦後政治では、自分で自分を守ることは、自分達がするのではなく、日米同盟という名前を借りてアメリカにお願いしてやってもらってきた。そもそも、自分で自分の国を守ることが、まともに議論されてきたのでしょうか。また、社会が豊かになり、平和な暮らしが続くと、自分達の親の面倒を自分達が見る、自分達の子どもの面倒を自分達が見るという、人間として当たり前のことを、時として行政が全て行っていくことが正しいかのように議論されてきたのではないのでしょうか。

もちろん、この高齢化の問題、少子化の問題というのは家族だけに任しておいていいと言っているわけではありません。しかし第一義的には、やはり我々がこの家族問題について取り組んでいくという意識がなくてはなりません。これは国を守ることと全く同じ事だと思うのです。アメリカとの同盟が大事であることも事実ではありますが、まず、我々が自分達の国を守るという意識がなければ、アメリカだって我が国を守ることができないわけです。こ

のような当たり前のことが実は戦後の政治の中で失われてしまっており、まさに道議の崩壊が戦後政治の根本のところで行われていたわけです。それがずっと半世紀にもわたって続いてきたために、我々国民は道議のことを忘れてしまい、無責任なことだけに議論が終始するようになってしまったのではないのでしょうか。

その結果として戦後社会の鬼子として民主党政権が誕生したのだと私は思っております。従いまして、道議を回帰させるためにも我々自民党がこうした戦後政治そのものを、もう一度総括して見つめ直すことが必要だと思うわけであります。

今後ともこうしたことをしっかり国民の皆様方に訴えていきたいと思ひます。ありがとうございました。